

スタイルシフトにおける非デスマス形は いかに情意を表すか

岡崎 渉

1. はじめに

デスマス形・非デスマス形というスタイルは、相手との関係や場面、話題等に応じていずれか一方が選ばれるとされている。だが、同じ会話の中でも、実際にはしばしばもう一方のスタイルへのシフトが起こる。このスタイルシフト（以下、シフト）¹⁾という現象を巡って、従来デスマス形主体の会話においてシフトされる非デスマス形を中心に、多くの研究がなされてきた。一連の研究によると、シフトされた非デスマス形は、主に聞き手に対する親しみの表示や心理的距離の短縮といった機能を果たすという。一方で、非デスマス形は単一のスタイルとして見なせず、常にそのような情意的機能を果たすわけではないことも指摘されている。しかし、シフトされた非デスマス形が、どのようにして情意的機能を果たすのか、これまで十分な調査がなされておらずはっきりしない。

そこで本研究では、デスマス形が主なスタイルとして用いられている会話をデータに、シフトされた非デスマス形による情意的機能が、どのような方法によって果たされているのか検討を行う。

2. 先行研究

会話におけるシフトの研究は、デス

マス形が主に用いられる会話（以下、デスマス形会話）での、非デスマス形へのシフトを中心に数多くなされてきた（生田・井出, 1983; 岡本, 1997; 宇佐美, 1998, 2001, 2015; Okamoto, 1999; Cook, 2002, 2008; 三牧, 2002, 2013; 陳, 2003; 伊集院, 2004; 申, 2007; ナズキアン, 2007 等）。多くの研究において、デスマス形会話における非デスマス形へのシフトは、ランダムに行われるわけではなく、特定のタイプの発話に生じやすく、その主な機能は相手との心理的距離の短縮や、親しみの表示といった情意的機能²⁾であるとされている。ポライトネス理論³⁾を援用した研究では（宇佐美, 2001; 三牧, 2002, 2013; 伊集院, 2004 等）、非デスマス形へのシフトはポジティブ・ポライトネスを実現するストラテジーの一種と見なされている。非デスマス形が、聞き手との心理的距離や改まりの度合いといった点で、デスマス形とは対比的に捉えられていることが窺える。

しかしながら、デスマス形会話で用いられる非デスマス形には、例えば文末詞⁴⁾の「ね」「よ」「の」がほとんど付加されないように（伊集院, 2004）、どのような発話でも自由に用いられるわけではない。では、デスマス形会話でも用いられる非デスマス形と、用いられない非デスマス形は、どのように区別できるだろうか。

野田(1998)は、非デスマス形には相手を丁寧³⁾に待遇しない「非ていねい形」と、丁寧に待遇するかどうか自体を考慮しない「中立形」があるとしている。デスマス形主体の文章・談話において用いられる非デスマス形は通常「中立形」であり、主に心情文と従属文という聞き手が意識されない発話で用いられるという。反面、主張文や伝達文といった聞き手への働きかけが強い発話では、通常非デスマス形は用いられないとされている。

Cook (2002, 2008) は、小学校の授業やインタビュー会話といった実際のやりとりに基づき、非デスマス形には異なる二つのタイプが混在していることを指摘した。一つは例(1)のような、聞き手に対する話し手の情意的態度を表すインフォーマルスタイル(IF)である。

例(1)【Cook(2002: 151-152)より引用】

- 01 H: 何が一番おもしろかった?
02 T: さっき話したよ。
03 H: でれーとしてね、ぶんなぐっ
04 ても怒^んないの。

これは非デスマス形主体の家族内の会話であるが、三つの非デスマス形発話だけを見ても、両者が近い関係であることがわかる。IFは、このように聞き手に対する情意的態度が表示されることで、聞き手と親しい関係、心理的に近い関係の者であることが表される。その特徴として、文末詞や文末の上昇音調、母音の引き伸ばし、音の縮約といった、affect keyと呼ばれる要素の共起する点が挙げられている。

もう一つは、例(2)のような、話し手

の意識が聞き手よりも、発話の情報内容に向けられていることを表すインフォーマルスタイル(IP)である⁵⁾。例(2)は、焼鳥屋でインタビューを行っているインタビュアーと来店客のやりとりである。

例(2)【Cook(2002: 157)より引用】

(I: インタビュアー, C2: 来店客)

- 01 I: あの、焼き鳥の魅力はどうい
02 うところですか?
03 C2: あ、やっぱり安くておいしい
04 んで、おいしいから。
05 →I: 安くておいしい。
06 自分である作っちゃおうなん
07 て気は?
08 C2: ありません。
09 →I: ない。

インタビュアーの質問(01-02, 06-07行目)に客が答えているが(03-04, 08行目)、インタビュアーはその応答を簡潔に言い換えている(05, 09行目)。この05, 09行目のような非デスマス形発話がIPに当たる。IPには主に裸の非デスマス形が用いられ、情意的態度よりも、話し手の意識が発話の情報内容に向けられていることを表す。

野田(1998)やCook(2002, 2008)の主張から、非デスマス形は情意的態度を表す場合とそうでない場合のあることがわかる。では、デスマス形会話での非デスマス形による情意的機能は、「非ていねい形」やIFが用いられることで果たされているのだろうか。だが、先述したように、通常デスマス形会話において「非ていねい形」や、affect keyである文末詞「ね」「よ」「の」が用いられることはほとんど

ない。そうであるならば、シフトされる非デスマス形による情意的機能は、どのようにして果たされているのだろうか。

長谷川 (2010) は従来のシフト研究で取り上げられていた事例を再検討し、シフトされる非デスマス形は、独話的になされる傾向のあることを指摘している。これは、発話を聞き手に直接宛てないようにすることで、聞き手に対する敬意を損なうことなく、情意的態度を表示することを可能にする一種のストラテジーであるとされている。

しかしながら、独話的に発話されることが、直接親しみの表示や心理的距離の短縮を可能にするわけではあるまい。例(2)のような非デスマス形は、相手の発話内容を繰り返していることから、聞き手目当て性は希薄であるものの、親しみの表示や心理的距離の短縮が行われているわけではない。野田 (1998) や長谷川 (2010) を踏まえると、非デスマス形は聞き手に宛てられた場合、同時に情意的態度も表示されるため、両者は不可分の関係にあることになる。だが、Cook (2002) の例から、聞き手に宛てられなかった場合は、情意的態度が表示されないときがあると考えられる。

長谷川 (2010) では、多くの先行研究と同様に、非デスマス形が情意的態度を表す形式であることが前提とされているため、どのような場合に、聞き手に宛てられない発話が情意的態度を表すのか言及されていない。非デスマス形が直接情意的機能を果たすわけではない以上、どのような方法がそれを可能にしているのかを明らかにする必要がある。

以上のことから本研究では、デスマス

形会話でシフトされる非デスマス形が、どのようにして聞き手目当て性をもたせず、情意的機能を果たしているのか、その方法を記述することを目的とする。

3. データ

用いたデータは、広島県と兵庫県で大学で採集された、初対面である11組による雑談(計290分)であった。データ概要を表1に示す。協力を得た会話参加者は、男性が4名、女性が14名、計18名であり、大学生、大学院生、社会人からなる。内4名(M03, F01, F02, F04)は2度会話に参加している。両者がデスマス形を使うようにするため、ペアはなるべく年齢の近い者同士とした。

P-01～P-08とP-09～P-11では、会話の採集方法が異なっている。P-01～

表1 会話データ概要

会話No. (会話時間:分)	ペアの組み合わせ (M: 男 / F: 女)	
P-01(22)	F01(社会人・27歳)	F02(社会人・26歳)
P-02(19)	F03(院生・20代半ば)	F04(院生・20代後半)
P-03(22)	F04(院生・20代後半)	F07(社会人・20代後半)
P-04(18)	M01(院生:30代半ば)	F05(院生・40代)
P-05(22)	M02(学部生)	M03(学部生)
P-06(22)	M03(学部生)	F06(学部生)
P-07(17)	M04(学部生)	F02(社会人・26歳)
P-08(18)	F01(社会人・27歳)	F08(学部生)
P-09(49)	F09(学部生)	F10(学部生)
P-10(50)	F11(学部生)	F12(学部生)
P-11(33)	F13(学部生)	F14(学部生)

P-08は、ディスカッションに参加するという名目で来てもらった、初対面となる参加者二名が、同じ部屋で待機しているときに行った雑談である。この際の雑談も録音していたことは、会話参加者に事前に承諾を得ている。

P-09～P-11は、大学内のカフェで収録したものである。協力者にはカフェに直接来てもらい、同じテーブルに座った初対面となる二名に、内容は何でも良いので50分間自由に話してもらうよう伝え、調査者は店外に出た。データに用いたのは、調査者が二名の元を離れてから、50分経過して戻ってくるまでの間に行われた雑談である。但し、P-11のみICレコーダーのトラブルにより、会話開始から20分ほど経過した後の部分のみをデータに用いている。収集した音声は、文字化を行い分析に用いた。文字化の規則は基本的に宇佐美(2007)に従った。

4. スタイルの定義

本研究で用いる単位としての「発話」は、基本的に統語的単位である「文」に基づく。文字化資料を作成する際は、「発話」の単位で改行を行い、それぞれにスタイルを認定した。但し、感動詞等の相槌は他の発話と対等には扱えないため、「発話」に含めなかった。相槌には、相手発話の途中で挟まれる「はい」「そう」といったスタイル上の対立をもつものも含まれる。

スタイルは、「デスマス形」「非デスマス形」「その他」のいずれかを、各発話末の形式により認定した。スタイルは節末でも選択が可能だが、本研究で収集された会話では、節末でデスマス形が用いられることはほぼなかったため、発話末の

形式のみを研究対象とした。

「デスマス形」は、発話末が「です／ます」やその活用形、または、それらに文末詞や文末詞的に用いられた接続助詞が付加された発話である。「非デスマス形」は、発話末に「です／ます」やその活用形が用いられておらず、用言の終止形や名詞で終了している発話、或いはそれらに文末詞や終助詞的に用いられた接続助詞が付加されている発話とした。したがって、名詞一語文も含まれる。「その他」は、言い切れなかった発話や、「なるほど」等、統語的に「です／ます」が付加できない発話である。

5. 結果

すべての発話の内、データ全体でスタイルが認定された発話数は、デスマス形が3112(62.0%)、非デスマス形が922(18.4%)、その他が983(19.6%)であった。また、すべての話者がデスマス形を基本のスタイルとして用いていることを確認した。すべての非デスマス形発話を対象に、どのように情意的機能が果たされているのか、分析を行った。本節ではその結果を、言語的特徴、音声的特徴、文脈的特徴という三つの側面から記述する⁶⁾。

5.1 言語的特徴

Cook(2002, 2008)の言う affect key は、非デスマス形に用いられることで、話者の情意的態度を表示させる要素である。だが、デスマス形会話における非デスマス形の場合、affect keyの中でも用いられるものと、用いられないものがあるようである。まず、文末詞について取り上げる。非デスマス形発話の内、文末

表2 各文末詞の使用数と割合

文末詞	使用数	非デスマス形発話に占める割合(%)
ね	6	0.7
よ	5	0.5
の	2	0.2
だ	43	4.7
か	92	10.0
な	88	9.5
っけ	10	1.1
わ	3	0.3
ぞ	1	0.1
合計	250	27.1

詞が用いられた発話の数は250 (28.7%)であった。各文末詞の使用回数を表2に示す⁷⁾。

使用頻度には文末詞間で顕著な違いのあることがわかる。伊集院 (2004) では、大学生同士によるデスマス形主体の初対面会話において、「ね/よ/の」の用いられた非デスマス形はほとんど見られなかったことが報告されている。本研究のデータにおいても、「ね/よ/の」は使用数がそれぞれ6回、5回、2回と、明らかに使用が控えられていることがわかる。

使用が多かったのは、「だ/か/な」といった文末詞であるが、これらは多くの場合、以下の例 (3) (4) (5) のように、聞き手に直接宛てない発話で用いられていた。シフトされる非デスマス形には独話的な発話が用いられやすいという長谷川 (2010) の主張とも合致する。

例 (3) 【P-06】

- 01 M03: あーほんならもうがつつり
02 ですねもう。

- 03 F06: がつつりですほんまに。
04 → M03: へー、大変だ。

例 (4) 【P-10】

- 01 F11: え、浜田市、え、何がありま
02 すじゃあ逆にhh。
03 F12: 最近セブンイレブンができ
04 ましたhh。
05 → F11: あららららら、勝ったなhh。

例 (3) (4) のそれぞれ04行目、05行目の発話で用いられている、文末詞「だ」「な」は、「ね」や「よ」と違い、非デスマス形で用いられても聞き手目当ての発話とは聞かれない。

例 (5) 【P-06】

- 01 F06: あ、社会起業です。
02 【4発話省略】
03 M03: あーなんか、学問として[楽
04 しいかなみたいな。
05 F06: [そう
06 ですね。
07 M03: へー。
08 F06: んー。
09 → M03: 社会起業か。
10 でも社会起業学科とかやっ
11 たらそのなんてゆうんで
12 しょう。

例 (5) では、F06の専攻が社会起業学科であることが明かされ(01行目)、07、08行目でこの話題が終了しかけている。だが、09行目でM03が、直前の話題である「社会起業(学科)」に「か」を伴う独話的な発話を行うことで、10行目で話題が継続されている。09行目の発話は聞き手

に宛てられたものではないが、「か」により相手の提示した話題に対する関心が示されているという点で、情意的機能が果たされている。

例(3)(4)(5)のような、相手の発話に対して、率直に感情を表出する発話でシフトが起こりやすいことは、多くの先行研究で報告されている(生田・井出, 1983; Okamoto, 1999; 陳, 2003 等)。この種の発話は聞き手に宛てる必要がないからこそ、「だ／か／な」といった独話的に聞かれやすい文末詞も用いられやすいものと考えられる。これら特定の文末詞における使用頻度の高さは、長谷川(2010)の言うように、デスマス形の使用が社会的規範となっている会話において、この規範に反することなく、情意的態度を表す手段として活用されていることを反映している。

文末詞以外の言語的要素として、話し手の主観を表す要素であるモダリティ(例(6))や、同一語句の連呼(例(7))等も、affect keyと同様に、非デスマス形で用いられることにより、情意的機能が果たされていると考えられる。

例(6)【P-11】

- 01 F14: 机を動かすのとか超めんど
02 くさかったですよ。
03→F13: あー狭そう。

例(7)【P-08】

- 01 F08: 汗だくだくだし###
02 F01: あ、そうなん・・・
03→F08: 暑い暑いhh。

これらはいずれも率直な感情を表出す

る発話であり、モダリティや同一語句の連呼は、例(4)(5)と同様に、発話に聞き手目当て性をもたせることなく、情意的態度を強調する要素となっている。

5.2 音声の特徴

affect keyには言語的要素だけでなく、文末の上昇音調、母音の引き伸ばし、音の縮約といった音声的要素も挙げられているが、こういった要素は本研究のデータでも頻繁に見られた。例(8)では、F11が単語の確認を行うときに、軽い上昇音調を用いている(06行目)。

例(8)【P-10】

- 01 F11: すっごいたか- あ、でも、ア
02 イスホッケーとかもすごい
03 人気で高いん(はい)ですけ
04 どあの、なんで、なんてゆう
05 んですかね。
06→ こ-ケーリング?
07 F12: あーありますね。
08 F11: ゆうんですかね。

「ケーリング?」(06行目)、「カーリング」を指していると思われる)に対し、F12は反応を示しているが、06行目は半疑問形と呼ばれる言い方であり、自問とも聞くことができるため、それだけ聞き手目当て性は抑えられている。このように、文末の上昇音調の大半は独話的な発話として用いられていた。

例(9)では、M02が、高校生のときに行った海外への修学旅行が豪華なものだったことを話している。

例(9)【P-05】

- 01 M02:【中略】、んで団体で行ってる
02 からぼぼ貸し切り。
03→M03:へーすげー。
04 M02:なんかやりたい放題hh。
05→M03:えーなーそんなとこ。

M02のエピソードにM03が驚きを示しているが、「すげー」「えーなー(いいな)」と、音の縮約と引き伸ばしが情意的態度を強調させている。これらの要素は、多くの話者に頻繁に用いられていることから、発話の聞き手目当て性にはさして関わらないものと思われる。

以上に挙げた言語的・音声的要素の多くは、Cook (2002, 2008) の言う affect key に該当するものであるが、affect key は情意的機能にのみ着目したものであり、聞き手目当て性という点は考慮されていない。5.1, 5.2の結果から、デスマス形会話における非デスマス形は、affect key の中でも聞き手目当て性をもたせにくいものが、よく用いられていることがわかる。

5.3 文脈的特徴

では、情意的機能は非デスマス形に何らかの要素が共起することでしか果たされないのだろうか。分析の結果、非デスマス形は affect key やそれに相当する要素が含まれなくとも、発話がなされた文脈、特に直前の相手発話に依存して、同様の機能を果たすことがわかった。その一つが「繰り返し」である。本稿での「繰り返し」は、相手発話ないしその一部の繰り返し、または異なる言い方への言い換えとなる非デスマス形の発話を指す。

例(10)は、会話の収録を実施した大学

に初めて立ち立った二人のやりとりである。F02は、この大学が思った以上に広く、建物も豪華であったことから、旅行に來たような気分であると興奮気味に話しており、F01もそれに同調している。

例(10)【P-01】

- 01 F02: 若干(んー)、プチ旅行
[hhhh]。
02→F01: [プチ
03 旅行]。
04 そう(hhhh)、そうさっきも
05 その話して(hhhh)、ちよっ
06 と旅行、(ねー)した気分で。
07 F02: なんか、旅館の部屋から見え
08 るー hhhh(hhhh)。
09→F01: 旅館の部屋。
10 F02: そうですねー。

F02が興奮している様子を冗談めかし話していることに頻繁に笑いが起こっている。F01は「繰り返し」(02-03, 09行目)を用いているが、これらの非デスマス形に共起する要素は特にはない。だが、「繰り返し」の機能を論じた中田(1992)の挙げる「情動的機能」を果たすものとして、相手への共感、協調を示していることが理解できる。このような理解は、発話単体ではなく、それまでの会話の流れ、特に繰り返しの元となった直前の発話が参照されることで可能となっている。

他の例として、聞き手目当てとなりやすい文末詞が用いられていても、聞き手に宛てられているとは解釈されない場合が見られた。例(11)ではF14が、アルバイト先のオーナーが急に店を辞めると言い出したときのエピソードを話している。

例(11)【P-11】

- 01 F14: オーナーのことどうだっ
02 たってゆうの聴いたらなん
03 か、すごい古株のバイトの人
04 が一、や、正直だめだったと
05 思いますとか言い出して。
06→ 言えよじゃあ。
07→F13: そう思ったら言えよ。
08→ [最初っから言えよ。
09 F14: [あたしたちには言えないん
10 だからゆってくれよって、す
11 ごかったです。

06, 07, 08行目では、すべての発話に文末詞の「よ」が用いられている。「ね」や「よ」は聞き手目当て性が強いので、デスマス形会話における非デスマス形には通常用いられない。だが、「ね」や「よ」が共起したからといって、自動的に聞き手に宛てられた発話となるわけではない。

上記例の場合、F14は「言えよじゃあ」(06行目)と、当時の心情を再現しているとわかる発話を行っている。続いてF13は「そう思ったら言えよ」「最初っから言えよ」(07, 08行目)と、当事者ではないにも関わらず、「言えよ」という部分的繰り返しを用い、あたかも当時のF14であるかのように発話することで、同調や共感を示している。これらの発話は、明らかに「今・ここ」の聞き手に宛てられたものではないとわかるため、文末詞の「よ」が用いやすくなっているものと考えられる。この例のように、相手の心情に同調する際に、非デスマス形に「よ」が用いられた発話は、P-05の会話にも見られた。

例(10)(11)に共通するのは、いずれも非デスマス形の理解が、直前の発話な

いしやりとりに依存しているという点である。シフトされる非デスマス形による聞き手目当て性の無さ及び情意的機能は、当該の発話単体で決まるものではなく、やりとりの文脈に埋め込まれて初めて理解可能となるものであると言える。

以上、デスマス形会話における非デスマス形が、どのようにして聞き手目当て性をもたせないことと、親しみの表示や心理的距離の短縮といった情意的態度の表示を同時に達成しているのかを見た。

6. まとめと今後の課題

従来、デスマス形主体の会話における非デスマス形の機能は、主に親しみの表示や心理的距離の短縮であるとされてきた。しかし、非デスマス形は常にそういった情意的機能を果たすわけではないため、実際の会話において、どのように用いられることで情意的機能が果たされているのか不明であった。本研究では、デスマス形会話において、話者が非デスマス形を用い、聞き手目当て性をもたせず情意的態度を表示する方法を、言語的特徴、音声的特徴、文脈的特徴という三つの側面から記述した。

デスマス形・非デスマス形というスタイルは、丁寧さや改まりといった情意的態度の点から対比的に捉えられがちである。だが、会話におけるスタイルの機能は形式と一対一で対応しているわけではない(岡本, 1997; Okamoto, 1999; Cook, 2002, 2008 等)。会話でのシフトに関する研究では、非デスマス形と情意的機能の結びつけが安易に行われている感がある。非デスマス形による情意的機能は、本研究で示されたように、聞き手

目当て性や言語的・音声的要素、文脈との協働により果たされるものであるという前提に立つ必要がある。

最後に、本研究のデータでは、Cook (2002, 2008) の言う IP に当たるような、情意的機能を果たしているとは思われない非デスマス形も多く見られた点を指摘したい。非デスマス形が情意的機能の表示と直結するものではない以上、情意的機能を果たさない非デスマス形へのシフトは、どのような目的に動機づけられているのか、この点が新たな問いとして浮上する。今後の課題としたい。

注

- 1) 研究者によっては「スピーチレベルシフト」といった用語も用いられているが、本研究では「スタイルシフト」で統一し、当該会話で主体となっているスタイルとは異なるスタイルが用いられることを指すものとする。
- 2) 本研究における「情意的機能」は、ポライトネス理論で言う、近接欲求や承認欲求に基づくポジティブ・ポライトネスに相当するものであり、会話相手に対する親しみや共感の表示、心理的距離の短縮といった機能を指すものとする。
- 3) Brown & Levinson (1987) が提唱した、会話参加者が円滑な人間関係を構築・維持するための言語行動を説明した理論である。
- 4) 本稿での「文末詞」は、文末で用いられる付属語であり、Cook (2002, 2008) の言う“(sentence) final particle”を指すものとする。
- 5) Cook (2008) では、“detached style”

と呼ばれているが、“impersonal style (IP)”と同一のものを指している。

- 6) 本稿で挙げる方法が、デスマス形会話での非デスマス形が情意的機能を果たす方法を網羅するものではない。
- 7) 複数の文末詞が用いられた場合、煩雑になることを避けるため、末尾の音節のみを数えた。即ち、「～なんだ」は「だ」として、「かな」は「な」として数えた。

会話例に用いた記号凡例

(発話)	相手の発話中になされた相づち
…	言い淀み
[隣接する発話との重複が開始された地点
-	直前の音の声門閉鎖音による中断
?	直前の部分が上昇音調
h	笑い、または直前の発話が笑いながらなされている
#	聞き取り不可

参考文献

- Brown, P. & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.
- Cook, H. M. (2002). The social meanings of the Japanese plain form. In Akatsuka, N. & Strauss, S. (Eds.), *Japanese/Korean Linguistics*, Vol. 10: 150-163. CSLI Publications.
- Cook, H.M. (2008). Construction of Speech Styles: The case of the Japanese naked plain form. In Mori,

- J. & Ohta, A. S. (Eds.), *Japanese Applied Linguistics: Discourse and social perspectives*: 60-108. Continuum International Publishing.
- Okamoto, S.(1999). Situated Politeness: Manipulating honorific and non-honorific expressions in Japanese conversations. *Pragmatics*, 9 (1) : 51-74.
- 生田少子・井出祥子(1983)「社会言語学における談話研究」『言語』12, 77-84.
- 伊集院郁子(2004)「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6(2), 12-26.
- 宇佐美まゆみ(1998)「初対面二者間会話における「ディスコース・ポライトネス」」『ヒューマン・コミュニケーション研究』26, 49-61.
- 宇佐美まゆみ(2001)「「ディスコース・ポライトネス」という観点から見た敬語使用の機能—敬語使用の新しい捉え方がポライトネスの談話理論に示唆すること—」『語学研究所論集』6, 1-29.
- 宇佐美まゆみ(2007)「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese: BTSJ) 2007年3月31日改訂版」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度 科学研究費補助金 基盤研究B (2) (研究代表者 宇佐美まゆみ) 研究成果報告書
- 宇佐美まゆみ(2015)「日本語の「スタイル」にかかわる研究の概観と展望—日本語会話におけるスピーチレベルシフトに関する研究を中心に—」『社会言語科学』18(1), 7-22.
- 岡本能里子(1997)「教室談話における文体シフトの指標的機能—丁寧体と普通体の使い分け—」『日本語学』16(3), 39-51.
- 申媛善(2007)「日本語と韓国語における文末スタイル変化の仕組み—時間軸に沿った敬体使用率の変化に着目して—」『日本語科学』22, 173-195.
- 陳文敏(2003)「同年代の初対面同士による会話に見られる「ダ体発話」へのシフト—生起しやすい状況とその頻度をめぐって—」『日本語科学』14, 7-28.
- 中田智子(1992)「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究所報告104 研究報告集』13, 267-302.
- ナズキアンフミコ(2007)「インタビュー談話における常体の機能」『言語学と日本語教育V』南雅彦(編), くろしお出版, 141-155.
- 野田尚史(1998)「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194, 102-89.
- 長谷川葉子(2010)「第5章：親密さと敬い」『日本語から見た日本人—主体性の言語学—』廣瀬幸生・長谷川葉子(編), 開拓社, 134-157.
- 三牧陽子(2002)「待遇レベル管理からみた日本語母語話者間のポライトネス表示—初対面会話における「社会的規範」と「個人のストラテジー」を中心に—」『社会言語科学』5(1), 56-74.
- 三牧陽子(2013)『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版
(兵庫教育大学)